あの日あの頃

私の転機

「日中両国の架け橋になる」二つの基点

●環日中ビジネスサポート 代表
李 環宇

私が初めて来日したのは、1991年12月のこと。福岡市の日本語専門学校に入学するためだった。以来、30年以上にわたり日本と関わり続け、現在は外国人の人材育成を主な業務に中国やベトナム、ミャンマー、インドネシアなど、アジア各国でのビジネス展開をサポートする環日中ビジネスサポートの代表、外国人技能実習生の受け入れや人材教育および情報の提供に関する事業などを手掛けるCCS教育事業協同組合の代表理事を務めている。中国東北部にある吉林省の省都・長春市出身の私が、福岡で事業を展開することになったのは二つの転機があった。一つ目が、就職先として日本企業を選択したこと、もう一つが外国人研修生の受け入れ事業を手掛ける組合との出会いだ。

一つ目の転機は、福岡工業大の研究生だった97年のこと。大学院への進学も選択肢の一つだったが「日本と中国の架け橋になりたい」という思いが強く、就職を決意した。しかし、最初に内定したのは長春市の国土統計局。「日

2004年8月に入社した岩崎グループでは、旅行代理店の福岡営業所に勤務していた

中の架け橋になる」という思いを実現するのは難しいと考えていた矢先、福岡県筑紫野市に本社を置く換気システム用モーター製造会社から内定通知が届いた。同社への入社を即決したのは、中国・深圳市で始動する新工場の建設プロジェクトに関わってほしいとビジョンを示されたからだった。現地では、地元業者や政府との交渉などプロジェクト推進の中心メンバーとして、充実した日々を過ごすことができた。

工場の完成から半年後には新たなチャレンジをしたいと考えて会社を退職し、スイスでホテルマネジメントを研修した。そうしたなか、チャレンジ精神が旺盛な私に「30歳までに自分が好きなことにもう一度挑戦してみよう」という新しい思いが浮かんだ。「英語を習得してハワイで働きたい」という具体的なプランまで想像した。思い立ったら動かないと気が済まないのが私の性格。いろいろとお世話になった会社には申し訳ないと考えて、非常に悩んだが退職し、スイスの専門学校で1年間、英語を勉強することを決意した。そのときは、まさかこの判断が、日本との関係をより強くすることになるとはまったく思っていなかった。

その専門学校の学生は500人のうち450人が中国人で、教室では中国語が飛び交い、英語の習得に適した環境とは言えなかった。また、日本語を忘れたくなかったのでルームメイトには日本人を選んだが、彼女との会話では当然、日本に思いをはせる機会が増えた。そして日を追うごとに「私に一番合っているのは日本」だという思いが募った。

インドネシアの技能実習生送り出し機関のスタッフと（右から2番目が私）

環日中ビジネスサポートとCCS教育事業協同組合のスタッフは私にとって大切なビジネスパートナー（昨年12月の忘年会）

帰国した際に頼ったのは、日本で最初に就職した会社だった。退職するとき「親不孝者」と冗談とも本気とも取れる言い方をされた社長からは「自主退職した人は採用しない」と2度、言われたが、この時の私は運に恵まれていた。その会社が新規事業を開始するにあたり、日本語と中国語で会話できる人材を探していたからだ。採用された私は、長崎県央の小さな町で働くことになった。

その工場で2年ほど働いていたある日、鹿児島市に本社を置く岩崎グループがアジア向けに日本の情報を発信するCS放送局を開局すると知り、中国人スタッフが必要ではないかと考え連絡を入れた。実は、当時の私は「本当に自分に適した仕事はなんだろうか」と悩んでいた。番組を見ながら私の胸に去来したのは「日中両国の架け橋になる」という就職を決意した当時の思い。「自分の気持ちに蓋はできない」と感じた私は、同グループにお世話になることを決意した。

現在の仕事に就いているのは、福岡市の協同組合が外国人研修生の受け入れ事業に着手したことを知ったのがきっかけだ。「これまでのキャリアを生かせる」と直感して入組した。これが私にとっての二つ目の転機だ。「探し求めていた仕事はこれだった」といつも実感している。これからも「お世話になった福岡、そして九州に事業を通じて恩返しをしたい」という思いを胸に、事業を展開していきたい。